



改革なくして前進なし

澤 田 嗣 郎

会員の皆様、明けましてお目出とうございます。新年早々、まるでどこかの党首のスローガンみたいな過激な表題をお許しいただきたい。昨年は、本会会員である松本和子早大教授がIUPACの副会長に選出された。これは2年後に女性初のIUPAC会長誕生を意味する画期的なことである。ご活躍を期待したい。

さて、あらためて日本分析化学会の目的や役割を考えて見たい。今更申しあげるまでもなく本会の主たる任務は、①当該分野の学術振興、②若い人材の養成と教育、そして、③標準物質開発、計測標準法など社会に対するサービス（貢献）事業等である。

①は分析・計測という基盤科学の充実の重要性を我が国も深く認識し、先端分析・機器プロジェクトが2年目を迎えたところである。わずか2年目であるけれど、700以上もの応募テーマ（もちろん類似、同一テーマを含めてではあるが）が提案公募された意味は大きい。それらを注意深く分析し、いまだのような課題が当該分野に期待されるテーマであるか検討する好材料がそこにある。我が日本分析化学会の存立目的やカバーすべき分野に関して会員間でも様々な意見分布があると思うが、他分野から、また社会からどのような分析・計測法の開発が求められているか考察し、本会をどう進化させていくべきか考える好時期である。

②の若い学徒や研究者養成について考えてみたい。会長就任時の挨拶^{あいさつ}でも述べたが、大学等から分析教室を巣立った学生がどう社会で活躍しているか、分析化学という学問に対してどういう思いを抱いているか謙虚に聞いてみることは価値あることである。私個人の分析化学教育に対する感想はこうである。いま多くの大学等では前期、基礎分析化学、後期、機器分析化学を講義されていると思う。しかし、基礎分析化学に使われている教科書は多くの当該分野の専門家が著しているにもかかわらず、あまりに内容が画一的で新味に欠ける。分析化学は100年以上の歴史があり、完成された体系を教えることは義務であり、教える時間が足りないくらいであると反論されるかもしれない。しかし、何十年も同じ講義ノートを使い続けていないだろうか。機器分析化学に近年の大きな進歩があるのであるから、基礎分析化学は機器分析の基礎が理解でき、興味をもてるように内容を一変すべきであると思う。多くの学生は機器分析化学の講義についていけず消化不良をおこしている。

③は本会もようやくといってお叱り^{しか}を受けるかもしれないが、社会への貢献、サービス事業に本格的に着手したところである。もちろん我々も、霞^{かすみ}を食っては生きていけない差し迫った事情があることが本事業に収益を期待する本音もあることは否定しないけれど、権利を主張するばかりでなく、まず義務を自覚する良い機会であると思う。

以上、新たな年の初めにあたり、上に述べた三つの本会の事業のバランスの取れた展開を願い、まとまりのないまま拙文にもかかわらず会員の皆様にお届けした次第である。

〔Tsuguo SAWADA, 東京農工大学工学部, 日本分析化学会会長〕